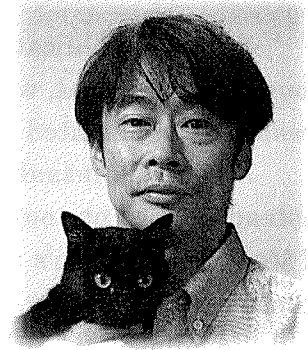


小野勇一先生の思い出

2015年7月20日に森下正明先生の弟子である小野勇一先生はご逝去された。私は1988年、九州大学理学部3年の後半に小野研（生態学研究室）に配属され、1994年に小野先生が退官されるまで研究室でご指導頂いていた。私は小野先生から学位を頂いた最後の大学院生でもある。また、退官されたのちに北九州市の博物館で館長をされていた2002年から2010年までの間、私は小野館長のもとで学芸員として勤務していた。



西南学院大学 山根 明弘

森下先生の孫弟子筋にあたる私が実際に森下先生にお会いしたのは、実はたった一回だけである。1990年3月の小野先生の還暦パーティに京都からおいでになった森下先生をご紹介いただき、短い自己紹介をさせていただいたのが、最初で最後の森下先生との会話となった。私は森下先生との接点が全くないのと同然である。しかし、森下先生を師と仰ぎ、心から慕っておられた小野先生のなかに、森下先生の現役時のお姿が見え隠れするのである。なぜ私がそう思うかといえば、ランチ後のひとときに、小野先生が珈琲とともに煙草を燻らせながら楽しそうにお話される森下先生との思い出ばなし、特にそのなかで語られる研究に対する森下先生の姿勢や学生指導のお姿は、まさに小野先生そのものだったからである。

ここに、小野先生との思い出を綴らせていただこうと思う。私の脈絡のない拙い文章で小野先生との思い出を語ることは、先生にとっても甚だ迷惑なことだと承知している。しかし、たとえ私的で偏った見方であれ、小野先生のお言葉をできる限り記録として書き残すことは、戦中戦後の時代を駆け抜けた生態学者の素の姿と、森下イズムを後世に伝えることになる。おそらく小野先生も草葉の陰から「おい山根、書いてみる」と言っているようにも思う。なお、小野勇一先生の生態学研究の業績に関しては、同じ小野研究室の先輩である江口和洋先生(2015)や岩本俊孝先生(2015)がすでに書かれているので、ここでは九州大学生態学研究室を中心とした日常的な出来事とその思い出について書こうと思う。

学部3年生の後期から小野研のメンバーとなったが、学部を卒業するまでは小野先生から研究指導をいただいた覚えはない。そもそも、4年生の卒論には一切関わっておられなかったように思う。当時の卒論というのは、研究室の准教授や助手の先生や、当時たくさん在籍していたオーバードクターの先輩たちが提案したいくつかのテーマのなかから、4年生が好きなものを選び、就職活動あるいは大学院への受験勉強の合間に行うものであった。私は、アゼネズミという東南アジアに分布するネズミの行動解析を卒論のテーマとしていた。たとえ大学院への進学を志望し、将来研究者を目指す学生であっても、卒論などはとても研究とは言いがたい一種のトレーニングのようなもの、というのが当時の小野研究室での卒論の位置づけだったのであろう。

大学院入試にパスして、進学してはじめて小野先生は、私を駆け出しの研究者として認めていただいたように思う。大学院では島に生息するノラネコの繁殖生態学を研究することにしたのだが、研究を始めるにあたってまず何から取り掛かれば良いものかと迷っていた。そのような時期のある日、小野先生は私の顔をみるなり「おい山根、来週相島に行くから船の時間を調べておけ」と、突然言い渡された。これまでまともに小野先生とはお話ししたことなどなく、その小野先生と二人で島に行くなど、畏れ多いのと同時に、何かへまをやらかして怒られるのではないかと不安でもあった。翌週、小野先生と私を乗せた渡船が相島に到着すると、小野先生は「その酒屋で酒を2本買って、紐で結わえてもらってこい。焼酎ではなくて、日本酒をな」と言ってお金を私に手渡した。そして、島の人に区長さんのお宅の場所を聞いて、全くアポなしで日本酒を手土産に挨拶へと伺った。区長さん宅では、自分の学生が今後お世話になること、島の寄り合いでもそのことをみんなに話してもらいたいこと、そしてどこかに空き家があれば使わせてもらいたいこと等、相島で調査を始めるにあたって私が必要であることを全て小野先生が短い時間の間に話をつけてくださった。その後、相島の猫を二人で観察しながら、猫の生態や社会についてお話ししていただいた。その時の小野先生の表情はとても楽しそうで、そしてとても優しくかった。研究室での、ともすると学生を寄せ付けられないような雰囲気とは全く違う小野先生に驚きながら、フィールドで初めてのご指導をいただいた。

そのおかげで、相島での猫調査を無事に開始することができた。私は子供の頃からあこがれていた本格的な動物の生態学的研究できるのが嬉しくて、真っ黒に日焼けしながらノラネコの観察を続けていた。その年の夏、小野先生は胆石摘出手術のため、入院された。手術後、研究室のメンバーと一緒に病院へお見舞いに行った。みんなが小野先生のベッドを取り囲むなか、私は後ろの方で隠れるように小野先生と先輩たちのお話を聞いていたが、小野先生は私の姿を見つけるなり「おい、その陽に焼けた男、ネコの調査は順調か？」と声をかけていただいた。びっくりして「はい」と答えると、小野先生はとても優しく笑っておられた。小野先生の学生指導の方針は、手取り足取り口やかましく指導するのではなく、言ってしまえば、ほぼ完全放任主義だったように思う。ただ放任主義といっても、学生が研究を進める過程で、ここぞという時には手を貸すが、それ以外は自分の好きなようにやれ、といった学生の自主性を最大限に尊重した指導方法だったと思う。そのことを物語るエピソードとしては、次のような思い出がある。相島のノラネコの研究では、生まれてきた子ネコの父親がどのオスネコであるかが、重要なポイントであった。しかし、これはオスの交尾を観察するだけでは不十分で、遺伝子を使った解析がどうしても必要であった。今でこそ、DNAを使った父子判定は動物生態学の分野では当たり前の解析ではあるが、当時はまさに開発されたばかりの新しい技術であった。また、当時の動物生態学者の意識としては、自分の研究対象としている動物を野外でどれだけ追跡できるかが最も大事であり、室内での実験などに没頭するのは邪道で、DNA解析などもつてのほか、といった風潮があった。また、DNA解析には従来の生態学では考えられないような高価な実験機材や試薬が必要とされた。そのようななか、小野先生にノラネコのDNA解析をやらせてくださいと頼み込むと「お前にその覚悟があるのか？」とまず尋ねられた。私が本気であることがわかるとすぐさま、DNAを使った父子判定では当時の第一人者であった京都大学霊長類研究所の竹中修先生にその場でお電話をかけられ、私が竹中先生のラボでDNA解析の技術指導を受けられるようお願いしてくださっ

た。あとで知ったことだが、小野先生は竹中先生とほとんど面識がなかったようである。小野先生のこの即決力と行動力は、私が当時の小野先生の年齢に達したとしても、全く真似することができないと思う。結局、霊長類研究所がある愛知県の犬山市に長期間滞在する必要がある、その間は相島でのフィールドワークができないという理由から、竹中先生のもとでのDNA解析修行計画は実現しなかった。しかしその後、小野研究室の隣の集団遺伝学研究室で、私がDNA解析ができるように、小野先生と助手の土肥昭夫先生が頼みに行ってくくださった。

他にも小野先生の指導方針を物語る次のような思い出がある。修士課程の頃には、DNAを使った親子判定が相島のノラネコでも実施が可能であることがわかり、まだデータ数がまだ少ないながらも、父子判定の結果も少しずつ出始めていた。博士課程に進学してしばらく経った頃、これまでの結果を京都の国際学会のシンポジウムで発表してもらえないかという依頼が舞い込んだ。国内学会でさえ、数回発表した程度でしかない私が、まだ研究途中である結果を、しかも通訳なしの国際学会で発表するのは、あまりにも荷が重かった。しかし、せっかく頂いたチャンスでもあるし、小野先生をはじめサポート頂いている研究室の先生方の恩にも報いたいという気持ちもあったので、引き受けることにした。それから発表までの数ヶ月、図表作りや発表原稿の作成などに頭を抱える毎日であった。発表のため京都に旅立つ前日、小野先生が「今からお前の発表を聞いてやるから、部屋にいるメンバーを全員呼んでこい」との命令が下った。小野先生をはじめ多くの先輩方が見守るなか、研究室で発表のリハーサルを行った。小野先生は腕組みをしながら睨みつけるように私の発表をじっと聞いてくださった。私自身は下手くそな英語で、内容にもそれほど自信があったわけではない。小野先生にダメ出しされたらどうしよう、などと不安な気持ちのなか発表を終えた。ところが小野先生からは「よし、よく出来とる。褒めてやるぞ。頑張ってこい」との思わぬ言葉をいただいた。小野先生にこんなに褒められたのは、後にも先にもこの1回だけだった。おそらく私の発表など、英語だけでなく内容についても、小野先生には聞くに堪えないものだったと思う。しかし、小野先生は「今のアイツに必要なのは、自信をつけてやることだ」というお気持ちから、私を過分に褒めてくださったのだと思う。その時は小野先生の本意はわからなかったが、まがりにも学生を指導する立場となった今の私には、その時の先生の優しいお気持ちがとてもよくわかる。

小野先生は煙草がとてもお好きで、教授室でもサロンと呼ばれていた研究室の居間のような部屋でも、いつも煙草をふかされていた。当時の研究室では、教員も学生も喫煙率が高く、半数以上がスモーカーだったと思う。まだ分煙などといった意識は全くないような時代で、それぞれの研究室でも廊下でも喫煙者である私たちは普通に煙草をふかしていた。その頃、外国製の煙草は国産のものよりも値段が高く、学生は国産タバコを吸っていたが、小野先生はマルボロや555（スリーファイブ）などの洋モクを吸っておられた。教授室とサロンはつながっており、その間のドアは小野先生が不在の時も鍵が閉められることはなかった。夜になって煙草を切らした学生たちは、教授室に忍び込んで小野先生の机に無造作に置いてあるマルボロのボックスから2、3本煙草を失敬していた。サロンで学生たちの酒盛りがあった翌朝などは、小野先生の煙草をほとんど吸ってしまうこともあったが、しかし翌日には必ずまた新しいマルボロのボックスが置いてあった。小野先生は、夜に学生たちが自分の部屋に入ってきていることも、また煙草を持ち出していたこともすべてお見通しで、むしろそれを喜んでおられたのではないかと思う。教授室には重要書類等がたくさん置かれていたと思う。それでも部屋に鍵をかけずに、学

生の出入りを自由に許していたのは、まだおおらかな時代といったこともあるが、小野先生は学生たちを信頼していたからだと思う。喫茶店で珈琲をご一緒する時など、自分の煙草に火をつけられた後、ぽんと私たちの前にマルボロの箱を投げられて、私たちが恐縮して1本いただいて煙草に火をつけると、大変嬉しそうな顔をされた。そして、よくこうやって森下先生と喫茶店で珈琲を頂いたお話をよくされていた。小野先生が学生だった戦後動乱の時代は、煙草や珈琲などは学生にはとても手に届かない贅沢品であっただろう。それを学生の時代に森下先生によくご馳走になり、今度は自分の学生たちに同じことをして下さっていたのだと思う。

同様に食べ物に関しても、小野先生はわたしたちによくご馳走して下さった。小野先生は奥様手作りのお弁当をよく持ってこられていたが、そうではない時には、サロンでたむろしている学生たちに「おい、欠食児はおらんか？」と大声で声をかけられ、まだ昼食をとっていない学生を自分の車に乗せてランチに連れて行って下さった。ラーメン屋、喫茶店、ファミリーレストランでランチをご馳走になることが多かった。ファミリーレストランなどでは、遠慮して値段の安い日替わりランチなどを注文しようとすると、小野先生はメニューの写真を見て「山根はこの肉がたくさん入っているのを注文しなさい」と、高いメニューを選んでくれるのである。また、ラーメン屋でも同様に「わしはもうあんり肉は食えんが、お前はチャーシュー麺を食べろ」と自分よりも高いメニューを選ぶように言うて下さるのである。また小野先生のご自宅でもよくご馳走していただいた。修士課程の頃だと思うが、小野先生のご自宅の庭作りの手伝いに朝から呼ばれたことがあった。古賀市薬王寺にある小野先生のご自宅に到着すると、小野先生は作業着姿ですでに作業を開始されていた。その姿は、一般人の目からは大学の偉い先生にはとても見えないような、どこから見ても農家のおじさんといった格好だった。庭づくり作業といっても花壇をつくるといったような生易しいものではなく、土を1メートル近くも掘り返して、大きな土管を埋め込んだり、大きな庭石をロープに縛りつけ、二人でかついだりもした。先生は還暦直前にも関わらず、私よりも元気で力があつた。「こういう作業はな、腕力ではなく、腰が大事なんじゃよ」とタオルで汗をぬぐいながら笑顔で話されていた。昼が近づくと、「昼飯に秋刀魚を焼くから、お前も手伝え」と私に七輪の火の起こし方から魚の焼き方まで教えて下さった。昼食は小野先生と奥様と3人で風通しの良い離れの2階でご馳走になったが、まるで家族の一員かのようにお二人には接していただいた。午後も作業が続き夕方が近づいてきた頃、「晩飯はすき焼きにするから、山根も食べていきいなさい、それと〇〇ちゃんも来るように電話しなさい」と先生はおっしゃった。〇〇ちゃんとは、そのころ小野研究室の事務職員で、私と付き合っていた（現在の私の妻でもあるのだが）。小野先生はそのことをすでにご存知だったようで、その後も何かと二人のことを気遣って下さった。結婚式の仲人をお願いに行くと、「悪いがワシは仲人というものはせんようにしておる」と断られたが、結婚式当日、教会から出てきた私たち夫婦に、大喜びでライスシャワーを振りかけて下さった。また、湯布院に新婚旅行に行く私たちに、「ワシの知人が経営している旅館があるので、そこに泊まりなさい。ワシからの新婚祝いじゃ」と言うて下さった。その温泉宿は「玉の湯」という湯布院なのかでは老舗で、高級旅館としても有名である。帰り際に宿の方が間違つて私に渡した請求書を見て、その額に驚いてしまった。私たちが常識としている宿代よりも1桁も高い料金だった。小野先生は、私たちを自分の息子や娘のように見て下さっていたのかもしれない。

私は2016年に、念願かなって大学の教員となった。私立の文系大学であるので、いわゆる不夜城の理系大学ではない。ゼミ生を抱えた研究室は持てるものの、学内での泊まり込みや煮炊き、飲酒・喫煙も禁止されているので、残念ながらかつての小野研究室と同じ雰囲気というわけにはいかない。また、文系の大学ということもあって、フィールドワークや実験を基本とした生態学をゼミ生の卒業研究とすることも難しい。大学院に進学する学生もいない。そのような状況のなか、私が小野先生から引きついた森下イズムを、そのまま若い世代に伝えていくのは現在困難である。私ができることといえば、ゼミ生たちを家族同然として面倒を見てやることや、飲み食いに不自由させないことくらいであろうか。あとは、喫茶店で学生と珈琲でも飲みながら、私を育ててくれた小野先生との思い出話をしてみようと思う。

引用文献

- 江口 和洋 (2015) 「小野勇一先生を悼む」、日本生態学会誌 65: 211-212.
岩本 俊孝 (2015) 「小野先生の思い出」、日本生態学会誌 65: 213-215.